
姉と妹は僕に優しい

有栖川夢夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉と妹は僕に優しい

【Nコード】

N9000Z

【作者名】

有栖川夢夢

【あらすじ】

魔法が当たり前に使われている世界。主人公音は幼い頃に、ある事から感情の一部を失ってしまう。それでもなお日々を過ごす中でさまざまな出会いをし、かけがえのない大切なものを見つけていく。

第0話 「登場人物紹介・資料集」(前書き)

とりあえずこの小説を読むにあたり最低限知っておけば読みやすいのではと思って作成しました。

参考にどうぞ (^ - ^)

ただしこれから登場するであろう人物および事柄などは伏せています。これらは実際に小説内で書いていくのであしからず (^ | ^)

書いてある中で「ここの意味・繋がりが分かんない」など理解しがたい部分があったら遠慮なく言ってください m (|) m

第0話 「登場人物紹介・資料集」

〈登場人物紹介〉

立花 音^{たちばなおと}……………この物語の主人公。17歳。私立清正学園 魔法支援科 2年。姉・妹を持つ。幼少の頃に、ある経験をしたために感情の一部を失う。家庭では主婦的役割として家事全般を担当。性格は優しく争い事が嫌い、鈍感。そのせいか、多数の女子から好意を持たれているが気づかない。

立花 静^{たちばなしずか}……………立花家長女。22歳。容姿端麗で一見外国人かと疑うかのような顔立ちをしている。一応社会人。立花家の大黒柱で唯一の収入源。普段はほんわかしておりその言動は緩いが、仕事となると人が入れ替わったかのようにきびきびとしている。弟である音を溺愛、その為他の男は眼中に無い。魔力は強力だがコントロールが若干苦手な様子。司る印は木。音に対する呼称は「音ちゃん」

立花 心^{たちばなこころ}……………立花家次女。16歳。兄と同じ学校に通う魔法戦闘科1年。今年入学したばかり。標準身長よりやや低くまだ子供っぽさが残る。家ではぐうたら担当。潜在魔力は3人の中で一番で入試における成績は学年トップ。だが自身の力に体が追いついていないために魔力が暴走しがち。司る印は火。呼称は「にい」

〈時代背景〉

魔法が未知の力から真実の力へと証明され、誰もが魔法を自由に使えるようになった時代。だがそれが故に魔法を世のためにふるう者もいれば、力を誇示するためだけにふるう者もいる。

〈用語集〉

清正学園^{せいせい}……複数の学科設置、最先端魔法学の学習を行えるために全国から優秀な学生が集まる。設置学科は魔法支援科、魔法戦闘科、魔法技工科など。なお高校には必ず魔法のカリキュラムがあり全国どこの学校でも学習が可能。

魔法……体気（体内で生成されたエネルギー）をM T Sにより魔力に変換され、その力によってもたらされたもの。基本印は火・水・木・金・土。発展系も存在する。なお個々がもつ体気の系統はある程度決まっておりM T Sにより変換されることで司印、司印^{しいん}が確定する。発展系はその例外によってもたらされたものだという説があるが確かな事はまだ分かっていない。

M T S……magic transformation systemの略。体気を魔力に変換させるための装置。魔法を使う者には専用のM T Sが用意される。他のものが使用しようとしても1人

1人に専用のメンテナンス・リペアがされているため機能しない。

印……………魔法の系統。

司印……………魔法には印（火・水・木・金・土）が存在し、そのうち最も相性が優れているものを司印しいんと呼ぶ。司印の場合他の印に比べ取得領域が広い。

第0話 「登場人物紹介・資料集」 (後書き)

いよいよ次話より本編突入です!! 最終的に何話になるのかは未定ですが、自分の頭の中には物語の最後は描きあがっているのですねに向かって、ただひたすら書くだけです(^ . ^)

脱線するかもですが(^ | ^ ;) その時はごめんなさいm(|) m

それでは本編で〜

第1話 「はじまりの朝」 (前書き)

「魔法」が未知の力から真実の力へとなり皆がその力を使えるようになつた時代。清正学園に通う立花音は幼い頃の体験から感情の一部を失つていた。それでも学園生活をおくる中で様々な人と出会いそして大切なものを見つけていく。

初連載です！

温かい目で見守って頂ければとm) | | () m

第1話 「はじまりの朝」

火、水、木、電気：人間の生活を支えているこれらのものは無限ではない。当たり前的事だが使いすぎれば無くなってしまう。地球上には電気が通らず暗い中で生活している者もいれば、水が汚染され飲み水に困っている者もいる。

そんな中ある一人の男がこう言った。

「人権は平等であつても我々の生活は平等ではない。何不自由なく生活をしている者もいれば、今この時にも電気がなく、水がなく、暖をとることさえできない者もいるのだ。しかしどうだろう。もしこれらを自らの手で、欲しいと願った時に作り出すことが出来たらそれが実現されたとき、そのときこそ、我々の生活は初めて平等と言えるのではないだろうか。」

当時この考えは賛否両論をよんだ。それでもなおこの考えに賛同した学者、研究者たちによつて研究が進められた。その結果、人々は自らの手でこれらを創造できるようになり、この新たな力を「魔法」と称した。後にこの出来事は「魔法革命」と呼ばれ、当時の研究内容は一冊の書物「魔法書」に記されたのである。

そして時は現代。「魔法革命」から百年と数十年。世界は大きく変わった。魔法は水を生み、火を生み、電気を生み。人々の生活を支えている。しかし、今もなお魔法書の存在は明らかになつておらず、その詳細は謎に包まれたままだ。知られているとすればこの魔法書は「アドミニストレーター」と呼ばれる者によつて厳重に管理されていると。そしてその者はあらゆるものを創造できると。だがこれはあくまで一つの噂にすぎない…。

ジリリリリ!!

AM 5時30分季節は春

鳴り響く目覚ましとカーテンの隙間から漏れ出した、まだ暗さの残る不透明な光とともに、僕、立花音は目を覚ました。

それと同時にいつものようにため息が出ってしまったのだ。

「はあ…またか…」

左側には姉・静が右側には妹・心が僕の体をごっすりホールドしている。

自身を一本の木だとするならば2人のその様はまさにコアラとでも
言えようか。

ではなぜ2人が僕と同じベッドで寝ているのか…

もちろん2人の部屋は別にある。しかしいつの間にかこうして部屋
に忍び来ては布団に潜り込んでいるのだ。理由を聞くと「みんな
寝ると楽しい。」「こうして寝るとぐっすり眠れる。」「などと、何
とも理解しがたい答えが返ってきたのを覚えている。

「…しずねえ。…うしろ。」

優しくではあるが自分の体ごと2人を揺すってみる。

「うっん…」

2人して全く同じ反応。起きる気配がまるで無い。

いつもながらに困ってしまつ。いったいどうすればいいものか。

「もつ…仕方がないなあ…」

半分諦めたような声でつぶやくと今度は大声で2人の名前を呼んだ。

「しず姉…！ こころ…！」

2人はようやく目を覚ました。

「うっん…音ちゃん〜」

「うみゅっ…にい〜」

「はいはい。2人ともくつつかない。
うから。姉さんも仕事でしょ…！」

「このままだと学校遅れちゃ

再びコアラになりかけた2人を振りほどくと僕はすぐさま1階へと向かった。洗濯機を回し、朝食を作る。家事・洗濯は僕の仕事だ。姉さんは仕事があるため時間ギリギリまで寝ている。ほんわかしているように見えるけど我が家を支える大黒柱なのだ。妹は…まあいづまでもないだろう。

気づけば時間は6時30分

そろそろ起きてくるはずだけど。そう思った矢先、まだ眠そうに目をこすりながら2人はリビングにやって来た。

「2人とも、おはよ。」

先程とは違い今度は優しく、温かな気持ちで声をかける。

『おはよ〜。(2人同時)』

何とも、まだ寝たりないとても言いたそうな声。

「もう、シャキっとしなよ!!--」

「だって～音ちゃんすぐベッドから出ていっちゃうんだもん。」

「にい～ 紅茶～」

「まったく…。ちょっと待ってて」

呆れた口調で、でも優しく微笑み2人に紅茶を淹れる。 モーニン
グコーヒーならぬモーニングティーだ。

朝は必ずアッサムティー。 そのまま飲んでも良いしミルクティー
にしても良い。 非常に飲みやすいから朝にぴったりなのだ。

「はい、どうぞー！」

香りの良い、綺麗な水色の紅茶を出してあげる。

『ありがとう～』

それを受け取るやいなや、冷えた体を温めるかのように飲み始めた。

これが僕たち立花家のいつもの朝だ。時は過ぎ季節は変わり環境は変わっていくだろう。けれどこの朝だけは変わらない。

今日も。そしてこれからも。

第1話 「はじまりの朝」(後書き)

〈次回予告〉

新学期を迎え、学校生活がスタート！
姉が… 妹が… どうする
音！

次回 第2話

「入学式」

「なんで…」

第2話 「入学式」(前書き)

く前回までのあらすじく

朝起きたら姉と妹が僕と同じベッドに…！ 呆れながらも音は朝食作りに洗濯と主婦業をこなす。

第2話 「入学式」

「ほら、急いで!! じゃないと遅れちゃうよ!! さすがに初日から遅刻するわけにはいかないでしょ?」

「待つてよ!! にい〜」

あれから朝食を済ませ各自準備をして、僕たち2人は学校へと向かっている。姉さんかというと一足先に仕事へと向かった。

時間はAM8時：20分

普段ならもう少し早く家を出ているが、今日はいつもとちょっと違う。

魔法が使われるようになり教育界にもその影響は現れた。魔法が学校の授業に取り入れられ、義務化されたのである。従って学生はそれまで学んできた一般教養に加え、魔法に関する最低限の教育（魔法の発動から制御、法律に至るまで）を受けなければならなくなった。また高校の名前も変わり、魔法を扱う学園：魔法学園が全国に創設されたのだ。

僕が通う清正学園せいせいもまたそのうちの一枚である。学園のもつ高度な教育、豊富な研究設備などを理由に全国から多くの学生が集まってくる。高等機関である大学や専門機関へ毎年多くの学生を輩出しているのも魅力の一つであろう。学園には4つの学科（魔法戦闘科、魔法支援科、魔法情報科、魔法技工科）があり、生徒たちは自分にあつた学科を専攻することで、より自分の技術や知識を高めることが出来るようになっていく。

今日はそんな清正学園の入学式なのだ。実は僕の妹心が、今日から同じ学園に通うことになる。僕はその2年生だ。

入学式を経験した親御さんなら分かるかもしれないがこつこつ朝は大抵時間通りにはいかない。忘れ物はないか、髪型は変じやないか、写真撮つてなどと、ついつい予想外の状況に陥ってしまう。気付いたら予定時間より家を出るのが遅れてしまった、なんて事はよくある話だ。そう……まるで僕らのように。

従つて、時間ギリギリの登校になってしまったのである。

「おっはよ〜！！ 相変わらずあなた達は仲が良いわね。羨まし

いぐらいだわー!」

少し早足で学園へ向かっていた僕らに、一際テンション高く声をかけてきたのは、幼なじみの七草千夏ななくさちかだった。近所ということもあってか千夏とは幼い頃から一緒に遊んだりしていた。もちろん今でもその仲は健在だ。彼女も僕らと同じ学園に通う2年生である。

「おはよ。朝からテンション高いね。」

「おはようございます。千夏さん。」

「はあ〜い。2人ともおはよ。おッ! 制服似合ってんじゃない! 心ちゃんもついに高校生か〜 いや〜早いもんだ。で・も……仲良く登校も良いけど時間やばいと思うよ?」

千夏にそう言われ時間を見ると……

AM 8時30分

僕らの学園は45分からHRが始まる。しかも今日は入学式のため10分早く時間が設定されている。つまり35分からHRが開始ということだ。

「…やばッ! もうこんな時間。こころ、急ごう!」

「フフ、2人は果たして間に合うのでしょうか？ おっ先〜!!」

そう言うと千夏は手を振りながらさっさと行ってしまった。あいつは足が早いからな。

「あッ!!ちょ…って、もう見えないし。どんだけ早いんだよ。」

「にい。 私たちも急ご? まだ間に合う!」

心は隣に歩いていていた僕の腕をとり、走り始めた。

こうして僕らも千夏の後を追うように学園へと向かうのだった。

「なんで??」

なんとか僕らは間に合い、それぞれの教室へと向かった。

この学園は専攻は違ってても、専門科目の授業以外同じ授業を受けるため、クラスを専攻ごとに分ける事はしていない。

従って専攻が違うもの同士が同じクラスになることは何ら珍しい事ではない。 しかもクラス替えがないため2年生ともなるとクラスのみんなが顔馴染みとなる。

先程僕らをおいて先に行つた幼なじみも同じクラスだ。彼女の専攻は魔法戦闘科。妹と同じである。

ではなぜ僕が疑問を感じているのか……

それは決して “専攻が違うもの同士がクラスメイト” だからではない。

そう、あれは入学式での新任の先生紹介の時だった……

妹の心が新入生代表として挨拶を終えると、次に新任の先生が紹介された。（新入生代表挨拶は今年度の入試トップの学生が務める）

自分は列の後ろだったため、初めその新任の先生が誰なのかよく分からなかった。

だが教頭先生からマイクを渡され一言話し始めると、なんとも聞き慣れた声が聞こえてきたのだ。

「みなさん はじめまして。立花 静と申します。私はこの卒業生でもあるため、再びこの学園で過ごせる事に喜びを隠しきれません。担当は保健医をさせて頂きます。皆さんの心と体、安心して学園生活を送れるようにしっかりとサポートさせて頂きます。これからどうぞ宜しくお願いいたします。」

パチ パチ パチ

会場から拍手とともに主に男性陣から「まじ可愛い!」「胸でか!」と小言で囁かれているなか、僕は頭の中が?でいっぱいだった。

普段の姿からは決して想像つかない程きびきびしている。だがあれは紛れもなく姉の姿だったからだ。

「なんで???」

入学式が終わリクラスに戻って来ても、僕は混乱気味だ。すると千夏が声をかけてきた。

「ちょっと。あれどついう事?? なんで静さんがここにくるのよ

「??」

「知らないよ。それはこっちが聞きたい…。」

「知らないって…家で何も聞かなかったの??」

「聞いてない。じゃなきゃここまでテンパってないって。」

本当になぜ姉さんは何も言ってくれなかったのだろうか……

まさか同じ学園で、しかも教師として来るとは……

新学期早々まさかの出来事に、大きな不安と共にただただ僕の頭には？が増えていくだけだった。

ちなみに入学式が終わってから僕の携帯へ

「にい〜!!」とメールがきた。

心も僕と同じ状況だった事は言つまでもないだろう。

第2話 「入学式」(後書き)

〈次回予告〉

新学期が始まり姉が教師として音と心の学校にやってきた!! その理由は??

いよいよ本格的に学園生活がスタート!! と思いきや転校生?? その正体やいかに!!

次回

第3話 「懐かしき人」

「やっと会えましたわね!!」

第3話 「懐かしき人」 (前書き)

〈前回のあらすじ〉

突如新任教師として音と心の学校にやってきた静。2人は予想外の出来事に動揺を隠せないでいた。

第3話 「懐かしき人」

「ねえ にい〜!」

「うん? どうした?」

「あれ” って夢じゃないよね?」

学校初日が終わり家に向かう帰り道、今日の出来事を振り返っていた。

当然、”あれ”というのは姉さんの事である。僕や心に何も話さず教師として赴任してきたこと、今だに僕たちは動揺を隠せないでいた。

「うん…。信じたくはないけどね、現実だよ…。ほら!」

ぶにぶに

僕は心のほっぺをつまんだ。

「あう〜。ほんとだ。…痛い。」

「でしょ？まあ何にせよ理由を聞かなきゃね！」

そつだ！！僕たちがいくら考えていても、本人に聞いてみなければ分からない。”姉さんが帰ってきたら理由を聞こう”という意見でまとまった所で丁度家に着いた。

僕らの母、立花 優^{ゆう}

魔法医師の中では名の知れた人物であった。医療技術もさることながら新薬の開発、新ウイルスの発見など多くの功績を残した。その中でも特に讃えられたのがカウンセリング（精神的治療）である。これは表情、言動から精神状態を読み取る。しかしその結果はあくまで憶測でしかない。虚偽なんて場合も十分ありえる事だ。

では母は患者の真実を見抜く為に何を行ったか…。

それは”相手の魔力の波長に、自分の魔力の波長を合わせること”だ。一般的にこれを”シンクロ”と呼ぶ。これを行う事でそのまま相手の精神状態・思考を読み取ることができる。そのため一人一人に最適な治療を施すことができるのだ。だがこの技術は大変難しく、最悪の場合自分または相手の魔力が逆流してしまい死んでしまう。従ってこれまでは患者・医師の安全を十分に確保できない事を理由に禁止事項とされていた。

だが母はあえてこの禁止事項を破った事で、カウンセリングの真意をみんなに伝えたのだ。

姉はそんな母親に似たのか、幼い頃からカウンセリングの能力を開花させ、度々母親に連れられて病院に赴いていた。今までにも多くの患者の心をケアしている。僕たち2人はてっきり亡き母の後を継ぎ、病院にてカウンセリングをしているのだと思っていたのだ。そのため、今回の赴任にはかなりの動揺をみせてしまったのである。

「ただいま〜。音ちゃん！ 心ちゃん！ お姉ちゃんのご帰宅だよん あ〜疲れたあ〜」

そついいながらいつものようにリビングへとやってきた。

「お帰り、姉さん。ご飯出来てるからみんなで食べよ〜！」

「わあ〜い！ ちょっと待ってて。すぐ着替えてくるから！」

「分かった。ほら心！ テレビばかり見てないでご飯の準備！」

「え〜。めんどくさいよ。にい、やってえ〜」

「なるほど〜……心はいらないうと。せつかく心の大好きなオムライスにしたのに。あ〜あ〜」

「にい！！ 心、何すれば良い？ お皿運ぶ？」

「フフ、それじゃあこれお願い。」

「りよ〜か〜い！」 ビシ！

いつもこうなら良いのにといいながら準備にとりかかる音だった。

『いったただつきま〜す』

必ず3人揃つての夕食。たとえ姉さんが仕事で帰りが遅くなっても、帰宅するのを待ち、必ず3人でご飯を食べる。これは我が家の数少ないルールの一つだ。

ちなみにこのルールをつくつたのは姉さんである。「お姉ちゃんだけ一人でご飯食べるなんて嫌〜！ みんなで一緒に食べるの〜！」とだだをこね、勝手に我が家のルールにしまった。一度だけ先に2人でご飯を食べた時は、いじれるは泣き出すは手がつけられなかった。それからというもの、の食事は必ず3人でとるようにしている。

「相変わらず音ちゃんのご飯は美味しいわね お姉ちゃん幸せ〜」

「はいはい。でもいつまでもこうしてご飯を作ってあげるなんてで

きないよ。僕だっけいずれは結婚するんだし。姉さんもご飯ぐらい自分で作れるようにならなきゃ。心もだよ。」

『結婚?』

「うん?どうしたの2人揃って。僕、何か変な事言った?」

「お姉ちゃんは許さないからね。」結婚”だなんて!音ちゃんはずつとここにいれば良いの!仕事だったらお姉ちゃんがするし」

「い、心も! いや…だ…よ?」(ボソ)

「ちょっと何言ってるの。そういうわけにはいかないでしょ?それに、自立してもらわなきゃ困るしね〜!」

「ダメだったらダメ。もし音ちゃんが女の子連れてきたらいっぱい嫌がらせしちゃうから!」

「やめて…頼むから。…そうだ、姉さん。聞きたい事があるんだけど。」

「付き合ってるのもダメだから!」

「違うって。教師の事だよ。なんで僕らに言わなかったの?」

「それ、心も知りたい! お姉ちゃん、なんで?」

本日の本題…それは”姉さんの仕事”についてだ。ようやく話を切り出せた僕は姉さんに聞いてみた。

「あれね〜？言ってなかったっけ？」

『聞いてない（よ）！！』

「じゅめ〜ん！つい言ったものだ。」

「てっきりあのまま病院で働いてるんだって思ってたよ。」

「もちろん働いてたよ。今まではみんなバラバラだったから良かったんだけど、心ちゃん、高校生になったでしょ？お姉ちゃんだけ別の所でお仕事って考えたら寂しくなっちゃって。だから……保健医として来ちゃった。」

「は……。」
「来ちゃった。」
「じゃないよ。」

「良いじゃない みんな一緒！それに音ちゃんと心ちゃんの成長を直接見れるわけだし！……いつでも音ちゃんに会えるしね。」

そついうと満面の笑みを浮かべ再びオムライスを食べ始めた。

「まったく姉さんたら。でもいい？姉さん！頼むから学校では”普通”に接してくれよ？教師と生徒なんだから！」

「分かってる 教師と生徒！」

本当にこの人は分かっているのだろうか？と疑問に思ったが、とりあえず本題であった理由については聞く事ができたので良しとしよう。そう思い音も再びオムライスを食べ始めた。

「おっはよ〜！！」

翌日、いつも通り登校した僕は挨拶をし終え席に座ろうとした。しかしその瞬間腕を掴まれ、廊下に連れ出されたあげく、クラスの大半の男子に囲まれてしまった。

「ちょ… ちょっと！！ どうしたのみんな？顔… 怖いんだけど。」

「聞いたぞ……。新しく来た保健医の先生。聞くところによると音の姉さんらしいな。それ… 本当か？」

まさかであった。昨日の今日で姉弟であることがバレるとは。いったいなんで？と思ったが次の瞬間その疑問は解決された。

向こうで千夏がゴメンと、顔の前で合掌しているのだ。きっとあいつの事だ、つい口を滑らせてしまったのだろう。

「おい！！どうなんだ？」

「そッ… そんなわけないだろ？ あんな美人な人が姉さんだなん

て。それに僕の姉さんはもつと雰囲気がふわふわしていてだな。」

「名字一緒だったぞ？」

「ぐ、偶然だよ！！偶然。」

「本当か？　なら良いんだが。」

なんとかごまかせたと思つた矢先、なんとも気が抜けてしまうような声で名前を呼ばれた。

「あゝッ！！　音ちゃんみつけ　はいコレ。　担任の先生が配つておいてだつて。　あらあら、音ちゃんてば人気者さん！！　みんな、音ちゃんの事宜しくね　で〜も〜……お姉ちゃんだって寂しいんだから、たまには保健室に遊びに来てね？」

そついうと保健室がある方向へ行つてしまった。最悪の状況にして……。

「音……とりあえず一発殴らせる！！」

予想外の姉さんの登場と先程のごまかしを否定する言動により、僕は男子たちに散々なめにあわされてしまったのだった。

それから数日が経つた。例の”姉騒動”もようやく落ち着きをみせ、

音も男子たちから解放されつつあった。クラス内で起こった姉騒動は学年中に広がってしまったが……。

「ねえ、ねえ、聞いた？ 今日転校生が来るらしいよ！」

「知ってる知ってる！！なんでも”美少女”って噂なんだって」

教室に入るやいなや女子たちが今日くるらしい転校生について話をしていた。そのせいか男子たちはいつも以上にテンションが高く、どこか落ち着きがない様子である。

「おつはよ！！ 音、聞いたか？ 転校生だってさ！しかも美少女！ いったいどんな人なんだろうな」

「おはよ、哲。でもそんなにテンションあがるものなのか？ 転校生、美少女ってだけで。」

「なんだよ。普通美少女って聞けば世の男子だったら嫌でもハイテンションになるだろ？ あっ、まさかお前……」

「ばか。そんなんじゃないよ。」

品川哲司。魔法技工科。

まだ入学したばかりの頃、一人でいた僕に声をかけてきてからなぜ

か意気投合し、それからというもののよく一緒にいる事が多い。

「どうせお前には分かりませんよ。あんな美人で巨乳のお姉さんがいるお前には！おまけに妹も美人だし。」

「あのな。好みってのがあつての。美少女つてだけで騒ぐ意味が分からん。」

「はいはい。そうですか。」

ガラガラ。

「みんな、おはよう。はいそこ。席につけよ。」

担任が教室に入ってきたため僕らは各自席についた。これから朝のHRが始まる。

「どれどれ。よし。みんな居るみたいだな。じゃあHRはじめるぞ。」

起立、礼、着席

「はい。じゃあまずはじめに転校生を紹介する。聞け、そして喜

べ男子ども！！女子だぞ！！」

『うおー！ー！ー！』

「四宝院！！入ってきていいぞ。」

そう担任の遠藤（女）が言っていると噂どおり、金髪で顔立ちが綺麗なわゆる美少女の転校生が入ってきた。そして教壇に立つやいなや自己紹介をはじめた。

「みなさん。はじめまして。四宝院レイナ（しほういん）と申します。わからない事が多々ありますがこれからよろしくお願いします。」

パチ・パチ・パチ

「良いか〜お前ら。分かんない事があって困ってたら手貸してやれ。四宝院！席はあそこだ。座ってくれ。」

遠藤が指さすその席は僕の隣。どうやらここが四宝院の席らしい。

ゆっくりと席に向かって歩いてくる。その間にもひそひそと話すものもいれば、その容姿に釘付けになっているものもある。対する僕は何ら興味のないように拍手だけしていた。すると四宝院は何故か

僕の目の前で足を止めた。

「やっと…会えましたわ。」

「うん？」

「聞こえなかったのかしら。”やっと会えた”と言っただけねど。」

「ごめん。以前どこかで会った？」

「まさか……。覚えてないとおもっしやるおつもり？」

「……………」

「はあ……。信じられませんわ……。コホン。四宝院レイナ！！幼い頃一緒に遊んだではありませんか！」

そう言われ考えてみるがさっぱり分からない。いつ、どこで会ったのだろう、そんな事を考えていたら呆れた声で再び四宝院は話し始めた。

「では……。れいちゃん……。とても言えば分かるかしら？」

その瞬間眠っていた記憶が蘇る。そうだ！！僕は幼い頃、四宝院に会っていた。そして度々遊んでいた。確かその時の呼び名は”れいちゃん”であった。

「れいちゃん？ まさかあのれいちゃんなのか？」

「やっと思い出したみたいですね。」

「久しぶり！まさかれいちゃんだったとは。全然気づかなかったよ。こんな美人になってるんだもん！」

「お久しぶりですわ、音。ところであの約束覚えているかしら？」

約束……。再び考えこむが一向に思い出せない。いったいどんな約束だったのか。なにせ中学校にあがる頃には、もう会っていなかったから。

「あなたって人は！まったく……。」

そう言ったれいちゃんの顔は先ほどとは異なり、どこか怒ったような顔色になっていた。

「ごめん。どれだけ考えても思い出せない。いったいどんな約束をしたんだ？」

一呼吸おいたその後、れいちゃんの口から予想外の一言がはなれた。

「良いでしょう。教えて差し上げますわ。ただし……私と”試合”をして勝つたらですが。」

「いや……。ちょっと待ってくれ。何故そうなる。普通に教えてくれれば良いだろ？何もわざわざ戦わなくても。」

「あなたに反論する資格はありません。それとも負けるのが怖くて？」

「そうじゃない。無意味に戦う必要はないってだけだ。みんなもそう思うだろ？なあ？」

「大切な約束を忘れるなんて最低……」

「四宝院さん可哀想……」

「立花……死んでお詫びしろ」

クラス中から非難の言葉が入れ替わり飛んできた。こいつら……。

するとそれまでずっと黙っていた担任が口を開いた。

「はい、みんな落ち着いて。まあなんだ……良いんじゃないか？話し合いで解決しないならお互い分かり合えるまで戦えば良い。戦ってはじめて分かることもあるからな。」

「ちょッ…!!」

「いったいこの人は今まで何を聞いていたのだろうか。まさか担任自ら試合をすすめてくるなんて。」

「決まりですわね。では改めて立花音に試合を申し込みますわ!!」

「そういつと日時・場所を告げ何もなかったかのように整然と自分の席に座ってしまった。」

「本当に僕は戦わなければならないのだろうか？疑問を抱きつつも結局勢いに押され、反論できない音であった。」

第3話 「懐かしき人」(後書き)

〈次回予告〉

転校生 四宝院レイナ。彼女と音が幼い頃交わした約束…。果たしてその約束とは何か、音は思い出すことができるのか。

一つの約束を巡って今戦いが始まる！！

次回

第4話 「約束」

「私はその一言で救われた…」

第4話 「約束」 (前書き)

（前回のあらすじ）

数年振りに再会した音とレイナ。だが音は幼い頃交わした約束を忘れていた。そしてレイナは音に約束をかけて試合を申し込む。

第4話 「約束」

ジャー…ジャー…ジャー

「ふう………」

私はシャワーを浴びながら幼い頃の……音と遊んでいた頃の事を思い出していた。

ダツダツダツ……

「音、ちよつと待ってー!！」

「遅いよ、れいちゃん!！ほら、はやく〜」

「もう速いって…ッ!！…キヤ〜」

ズシャー…!！!！!！

「だっ大丈夫?れいちゃん!！」

「いったーい…だから待ってって言ったのに!!」

「うっごめん!!」

私の父と音の父は大学の同級生。遊びに行ったり飲みに行ったり、とても仲が良かった。お互い結婚し家庭を持つてからもその付き合いは続いた。

私はそんな父に連れられ、よく立花家を訪れていた。そこで出会ったのが音だ。丁度私と同じ年。すぐ私たちは仲良くなった。家へ行く度、探検したり秘密基地を作ったり、いろんな事をして遊んだ。時には無茶をして怒られた事もあった。でもとっても楽しかった。

そして私は忘れない……

あの日の事を……

例え音が忘れていても私だけは……

「……忘れない」

夢を見た。

あれは確か……

幼い頃の……僕とれいちゃんが遊んでいた頃の夢だ……

夢の中のれいちゃんは何故か泣いていた……

両目から涙を流し可愛い顔がくしゃくしゃになるくらい泣いていた

……

そして必死に何かを伝えようとしていた……。

珍しく目覚ましより早く起きた音は、先程まで見ていた夢を思い出しながら、れいちゃんの事を考えていた。

数年振りに会ったれいちゃん。僕は初め気が付かなかった。昔はあんなにも一緒に遊んでいたのに。そして問われた。幼い頃交わした約束を覚えているかと……でも僕は答えられなかった。

あれから家に帰ってずっと考えていたけれど結局分からないままだった。いったいどんな約束をしたんだろう？

ジリリリ！！ ジリリリ！！

カチ…

「ふう……学校…行くか……」

「おはよ〜」

「おはよ〜！！ ねっ見てよこれ！！ 可愛くない？」

「どれ？うわっ！！めっちゃ可愛い」

「でしょ〜」

いつもと変わらぬ朝。HRが始まるまでみんな思い思いに過ごす。勉強する者、読書をする者、寝てる者、雑誌を見て一緒に騒いでる者、みんなそれぞれだ。そんな中、僕はどこか浮かない顔をしていた。

なぜなら……。今日約束を巡って、れいちゃんとの試合があるからだ。

「大丈夫なのか？今日の試合。」

「哲…。大丈夫。って言いたいところだけど…正直、勝てるかどうか分からないよ…。」

「おいおい。今からそんな弱気じゃダメだろ？」

「仕方がないよ。僕は戦闘系じゃないし。」

「だけだよ。」

僕の専攻は魔法支援科。主に回復や補助といった役割を担う。故に扱う術もその系統が多い。そのためどうしても攻撃系が劣ってしまふ。あくまで一般的にだが。

「哲の言う通りよ。」

「千夏…。」

「あなたも男なんだから、こうバシッとカッコイイところを見せてよね！…。」

「ハハ。最善は尽くすよ。」

正直戦うのは嫌だ。傷つくのも傷つけるのも。でも断るわけにはいかない。……大切な約束とは何か、知る必要があるのだから。

「来たわね……。」

「……。ねえ……。やっぱり戦わなくちゃダメなのかな？」

「ダメですわ。そう言ったでしょ。それに……戦わなくては意味がありませんもの。」

「……でも……！」

「いい加減になさい……！」

「……ッ……！」

「……。先生。お願いできるかしら？」

「あつはい。で、ではこれより2年D組四宝院レイナ対立花音の試合を始めます。時間無制限の一本勝負。どちらかが戦闘不能及び続行不能と判断された場合、立っていた者を勝者とします。なお試合に関する詳細は学校法則規定・試合項目に従うこととします。また安全確保のため立花保健医に同席して頂きます。では10分の休憩の後、試合開始とします。以上。」

「……………」

れいちゃんは無言で試合の準備にとりかかる。彼女は本気なのだろうか…。

「いったい僕はどうすれば……。」

「まっ。やるしかないだろ。ここまできたら。」

「そういうこと。良い機会じゃない。頑張ってください!」

「哲、千夏。どうして?」

「まあなんだ……暇だったからな。」

「うそ。心配だったんだよね。ずっと”音大丈夫か?”って言うてたんだよ!」

「ばっ……!! うるせエ〜!!」

「……にい。」

「……心まで。」

「私が連れてきたの。せつかくだからって。みんなに見守られていた方が音ちゃん心強いでしょ?」

「姉さん……でも……。」

「にい。頑張つて……。私……ちゃんと見てるから。」

すると心はその小さな手で決して強くはないけれど僕の服を掴んできた。その手は若干震えている。きっと心配してくれているのだろう。

「…………大丈夫だよ。心。」

そういつと微笑みながらそっと心の頭を撫でた。そして一度みんなの顔を見ると、ゆっくりと試合場へと足を進めた。

「両者前へ!!」

ザッ…………

「それではこれより試合を始めます。健闘を祈ります…………では、始め!!」

「手加減は一切なくてよ。覚悟は良い?」

「僕だって負けるわけにはいかない! だから…戦つ。」

「そう。…………。コンフューズビット!!」

一瞬にして6つの破片が彼女の周りに展開する。

「これは…………」

「このビットたちからは逃れられませんことよ。行きなさい!!」
すると展開されたビットはそれぞれバラバラの動きをしながら僕の方へ飛んできた。

「…ッ!!。ラン・アシスト!!」

ラン・アシスト

脚力増幅補助魔法。スピードを一定時間増加させる。

「あのビット、いったいどんな攻撃をしてくるのか…。まずは様子をみよう。」

ビットたちは僕の四方八方に飛び散り、次の瞬間電気を帯びた球を弾きだした。

「…ッ!!」

なんとかかわす。だがビットたちは弾き出すタイミングを上手くずらしながら次々と球を射出していく。

「いったい…どれだけ避ければ!!」

「無駄ですわ。そのビットたちは無限に玉を出し続ける。空気がある限りね。」

「…そうか!!」

音は一瞬ですべてを理解した。

魔法は体気（人間が体内に持つ、元々存在するエネルギー）。その質量は各自異なる。質量が多い事は魔法の強さを示す（をMTS（magic・transformation・system。これに身につける事ではじめて魔法を使える。形態はプレスレット、イヤリング、ネックレス、指輪などさまざまな形にすることが可能。）により魔力に変換。魔力を与えられた物は姿を変え強力な力を得る。これが魔法である。

そして魔法には印が存在しこれは性質を示す。基本印は火・水・木・金・土。発展系も存在する。司印とは自分と最も相性が良い印を示し、他の術より錬度が高い。つまり司印の魔法を鍛練することで他の魔法に比べ高段位の魔法を習得することができる。（司印は例外を除き一人一つ）

彼女の司印はおそらく金。その特性は生成・操作。ビットに自分の魔力を織り込み自分の意志で操作できるようにした。そしてビットの周りにある空気を球状に圧縮。同時に司印の金の発展系である電の魔力を加える。すると球状に圧縮された空気は電気を運び、電気の球となったのだ。

「どうやら気づいたようですわね。だが気づいた所で避けているだけあなたに何ができるといいますの？」

「くっ…！」

確かにこのままではただ体力が消費するだけだ。

「何とかしなくちゃ。」

「そこ…！ 甘いすわよ…！」

「…ッ…！しまった…！」

バアーーーーーン…！！

レイナは音の一瞬の気の緩みを見逃さなかった。結果、音は攻撃をくらう。そして煙が辺りを包み込む。

「とつさに体をひねり直撃をまぬがれたわね。でも…。」

「ハア…ハア…ハア…。」

なんとか直撃はまぬがれたもののダメージは予想以上に大きい。

『音（に音ちゃん）…！』

「大丈夫…。みんなは…そこで見てて。」

「フフ。なら、これならどうかしら？コンフューズ・ブラスト…！」

そういつとビットたちは彼女の前で筒状になり、先程より更に高密度に圧縮された、巨大な電気の球が撃ち出された。

「…ッ！！防御魔法、ディフェンスアップ・シールド！！」

ドオーーーーー！！！！

轟音が鳴り響く。

そして……

「うっ……くっ……」

「ここまでのようね。」

音の発動させた防御魔法はレイナの攻撃を防ぎきれず、先ほどより更に大きなダメージを負ってしまった。

「まだ……だ。まだ……戦える……」

「その体で？ボロボロじゃない。」

「おいおい。やばくないか、あいつ？」

「大丈夫……。まだ音の目は死んでいないわ。それに……ああ見えて強いんだから。そうでしょ？お2人さん！」

「そうよ。音ちゃんは強いんだから。だから大丈夫!!でも、こ
うして見てるだけっていうのも辛いものね……」

「にい……。」

これはなんだ？ 赤い……。そうか……。これは血だ。それに体が思うよ
うに動かない。あばらがもっていかれたのか。やっぱり初期魔法じ
ゃ防ぎきれなかったんだ。それにしてもこんなにも強かったんだな
……。昔はもつと……。ッ!!

その瞬間脳内に何かが映し出された。

「今のは？」

「戦えるなら立ちなさい!! 音!!」

なんだったんだ？一瞬にして映し出されたものは。でもあれは……。

「立ちなさい!!」

そつだ。まだ膝をつくわけにはいかない。僕にはみんながいる。そ
してまだ約束は何なのか聞いていない。それに今の映像……。する
と音はゆっくり立ち始めた。

「そつ。それで良いのよ。」

「……。れいちゃん……。本気でいくよ?」

確かめなくちゃ。

「……。きなさい。コンフューズ・ブラスト!!!」

再び球が撃ち出された。だが音は先ほどとは明らかに違う目つきで構えていた。

「……防御魔法。絶対領域!!!」

絶対領域

無属性防御魔法の上位魔法。通常の魔法とは違い魔法陣を使うため通常より魔法発動までの時間がかかってしまう。そのかわり魔法のもつ力は大きい。また魔方陣を伴う魔法は術者のもつ魔力によって左右される。(潜在魔力が小さいものは魔法の効果・力も小さい)

ドオーーーーーーン!!!!

再び轟音が響く。だが音の発動された防御魔法・絶対領域の前ではたとえコンフューズ・ブラストでも破れない。一瞬にして高質量の魔力を練り込んだ魔法陣を描き術を発動させる。それだけでいかに音の能力が高いかを示していた。そしてレイナは音の能力の高さを一瞬で理解した。

試合場を再び煙が包み込む。

「……ッ!!!」

次の瞬間煙の中から現れた音はその右手に刀状の物を形成させながらレイナが立っている場所へ飛んできた。

「…形成魔法、塵の剣!!」

塵の剣

空気中に浮遊する塵を集め剣化したもの。何層にも渡り圧縮してあるため強度は強い。

「…ッ!! コンフューズ・ネット!!」

ビットたちが一斉にレイナの前に集まり、掛け声と共にまるで蜘蛛の糸のように網目を形成した。

キーーーーーッ!!!

レイナのコンフューズ・ネットがかろうじて音の攻撃を跳ね返す。

「くそ。ダメだったか…」

「ふう…。なんとか防げたわね。なかなかやるじゃない。」

「ありがとう。でも次で決めるよ。」

私の全力を……私はもう指一本でさえも動かせないというのに……
レイナは限界であった。

「……やっぱり……強いね音は……。勝て……ないや……」

「……ッ……！」

だんだんと会場の煙が晴れていく。そして光景を明確に映し出す。
剣はレイナの頭ギリギリの位置で止まっていた。

「あ……れ……？」

「思い出した……ぜんぶ。あの日なせれいちゃんが泣いていたのか……
約束はなんだったのか。その涙のおかげで。」

レイナの瞳からは涙がこぼれていた。本人にはなぜ涙がこぼれているのか分からなかった。

「本当は戦いたくなかったんですけども形はどうであれ僕に思い出して欲しかった。……ごめんね。今まで忘れてて。」

そっとレイナの頭に手のひらをもってくる。そして優しくその頭を撫でる。

その日いつもと様子の違った父に連れられ向かった先は四宝院家。初めて訪れた。家に着くと黒い服装に包まれた人たちが居り、中には泣いている人もいた。

家の中に入ると大きな部屋に案内された。すでに何人もの人たちが用意されていた椅子へと座っていた。僕も言われた通り父の隣に座るとしばらくしてお経が聞こえてきた。涙を流す人、じっと目をつむり下を向いている人、誰ひとり笑顔の人はいなかった。

また別会場に案内される途中僕はこっそり抜け出した。あまりにも雰囲気为重たかったからだ。

走った先はたまたま広い庭。そしてその真ん中には見慣れた顔の、でもいつもより小さな子がうずくまっていた。

「れいちゃん!!」

「うっ…うっ…」

れいちゃんは泣いていた。それも可愛い顔がくしゃくしゃになるくらい。

「どびどび泣いてるの?」

「おどろさんとおかあさんが…うっ…」

「……?」

「もっ…いな…いの…私ひとり…ぼっちだよ…」

ようやく僕は理解した。れいちゃんのお父さんとお母さんは死んだのだと。だからみんな暗い顔をしていたのだと。

「れいちゃん…」

「音…。私…これからどうすれば…いいの？」

「……顔あげてよ。れいちゃんはひとりじゃないよ？だって僕がいるじゃないか。家族がいなくなったのなら僕が代わりになってあげる。れいちゃんの家族に。一緒になって泣いたり笑ったり怒ったりしてあげる。だからもう泣かないで？」

「でも…」

「大丈夫。僕がいてあげるから。」

「……約束してくれる？音は居なくならないって、ずっと家族でいてくれるって。」

「約束するよ。ずっといる。これからも…ずっと」

その後僕は父の仕事の関係で引越した。約束を守れないまま……。れいちゃんを残したまま。

どうしてこんな大事な事を忘れていたのだろうか？思い出せなかった

のだろっ？

「ずっといる。…これからもずっと。だって僕たちは家族なんだから。」

「っっっっっっっっっっ」

あの時のように、れいちゃんは両目から涙を流し顔がくしゃくしゃになるくらい泣いていた。

「ごめん。本当にごめんね、忘れてて。あの約束…今からでもまだ間に合うかな？」

「…うん。でも今度はひとりにしないで…。約束。」

「うん。…約束するよ。」

もう二度と忘れない。そしてひとりにさせない。それが新たに交わした約束。

「それにしても音って強かったんだな。」

「だから言ったでしょ？大丈夫だって。それより体はもう良いの？」

「うん。もう大丈夫。あの後姉さんに嫌というほど治療してもらったからね。」

試合のあと僕たちは姉さんに治療してもらった。さすが保健医。一瞬にして傷を治してしまった。必要以上に看病を迫られたが。まあ何より約束が思い出せて良かった。

「おはよう、音。」

「あっ！！おはよ。れいちゃ…！！！」

「今度からはレイナと呼びなさい。いつまでも子供扱いされているようで嫌ですわ。」

「でも可愛いくて良いじゃん。好きだよ？僕は。」

「スススス、好き？」

と、とにかく、あなたは良くても私が気に入りませんの。だから今後れいちゃんと呼ぶ事は許しません。良くて？」

「フフ。分かったよ。」

「な、何が面白いんですの？」

「レイナ、顔真っ赤。」

「なっ…！！！」

「あっ！！もつと赤くなっただ。」

「千夏！！！」

僕が引つ越した後は親戚の家に引き取られていたらしい。情報関係で日本のトップに君臨する大企業四宝院家。生活には不自由なかつたみたいだ。あれから少しずつ僕を探していたらしい。そして最近、ようやく見つけ出しこの度転校してきたそうだ。相変わらずその情報力は健在だ。

「約束するよ。ひとりにしない。だって僕たちは家族だから。」

そう再び決意する音であった。

第4話 「約束」 (後書き)

〈次回予告〉

音は心から弁当を作ってと頼まれる。快く引き受けた音は自分、静の分を含め3人分のお弁当を作る。まさかあんな事が起ころうとは知らずに…。

次回

第5話 「お弁当の力」

「絶対に…負けないんだから！」

第5話 「お弁当の力」(前書き)

↳前回のあらすじ

幼い頃の約束を巡り戦う音とレイナ。激闘のすえようやく思い出した音。新たに約束をし、2度と忘れないことを誓う。

第5話 「お弁当の力」

PM7:30 立花家 夕食時

「ねえ にい？」

「うん？何？まさかご飯口に合わなかった？」

「ううん！！とっても美味しいよ！」

「そっか。良かった。じゃあどうしたの？」

「えっとね…お弁当…作って欲しいんだけど。」

「お弁当？別に良いけど…。」

「ほんと！？」

「あゝ！！心ちゃんだけずるいゝお姉ちゃんもゝ！！！」

「わ、分かったから！でもどうしたの急に。」

「え？それは…その…」

昨日のお昼、いつものようにクラスメイトである未央と美由紀の3

人でご飯を食べていた。

「美由紀、ほんといつも美味しそうに食べるね。」

「え？そうかなあ。別に普通だよ。でも美味しいってのはほんとかないかな。なんて言ったって彼氏手作りのお弁当だもん。愛情たっぷり。」

「はいはい。それは良かったですですね。私なんかお母さんの手抜き弁当だっていうのに。」

「そんなことないと思うけどなあ。美味しそうだよ？」

「イヤミか。それより心。心はお弁当にしないの？」

「え？私？」

私はいつもコンビニで昼食を済ませる。お弁当にしようかなと思った事はあるけれど私は作れないしお姉ちゃんもたぶん無理。頼むとなったらにいただけ。これ以上負担をかけさせるわけにはいかない。朝・夕食だけでも大変だというのに洗濯や掃除までやってくれているのだから。

「私はいいよ。これで。」

「でも、栄養バランス偏らない？しっかりもらないとお肌に悪いぞ。まあ私が言えた事じゃないけどね。」

「それに…愛情もとらないとねえ。お兄さんに作ってもらったら？」

「良いじゃん。作ってもらいなよ！」私に愛情たっぷりのお弁当をつくって下さい”って！！心に頼まれたら嫌なんて言えないよ。私だったら作っちゃう！！」

「そんな恥ずかしいこと言えないって！」

「それはどうかなあ？言ってみなくちゃ分かんないぞ。私は作ってくれたけど。」

「……………。帰れ！！」

「ひどーい！！」

「あい…愛情、た…」
「言えるわけないよ」

「どうしたの？顔真っ赤だよ？」

「何でもない！何でも。たまにはお弁当も良いかなって。で、でもにいが嫌なら作らなくていいからね！！」

「嫌じゃないさ。分かった。腕によりをかけて美味しいお弁当作ってあげる！」

「お姉ちゃんのおも」

「分かったって！！姉さんの分も作るよ。ただし、2人とも残さず食べてよ?」

『はぁーい!』

こうして僕は心とついでに姉さんのお弁当を作る事になった。でもこの時の僕はまだ知らなかった。まさかあんなことが起きようとは…。

PM 12:00 2年D組 教室

『いただきます!』

昼食時。僕、哲、千夏おなじみのメンバーに加え、試合以来すっかり仲良くなったレイナの4人でご飯を食べる。

「おっ!!今日も弁当か!!美味そうだな」

「って、そう言いながらこっそり持っていくな!」

バシ!!!

「そうよ哲。こういう時は堂々と”奪って”いくものよ。こんな風にね!」

そう言うと一切のためらいもなく今日のメインであるカツを一切れ奪っていった。

「あっ、「らー！ー！やめる！ー！」

「うーん 今日も美味しい！ー！」

「ずり〜。なあ俺にも分けてくれよ。」

「仕方がないな。…ほら。」

カツについでいた衣をあげた。

「ひでえー。」

「それにしてもよく飽きませんわね。毎日作っているというのに。」

心に頼まれてからずっとお弁当を作っている。初めはめんどくさく思ったが慣れてくると意外に楽しい。味はもちろんのこと見た目にもこだわられるからだ。次はもっと可愛く、次はシンプルにといった具合だ。僕はすっかり弁当作りにはまってしまったのだ。

「まあね。慣れてってやつかな？何よりみんなには健康でいて貰いたいし。」

そうだ。みんなには元気でいてほしい。栄養をバランスよく摂取することで、健康作りの補助が出来るのなら作っていて苦はない。

「そういうものかしら…。」

「それに自分の作ったお弁当を残さずに綺麗に食べてくれるってのも嬉しいかな。まあたまには作って貰いたいとは思うけどね。」

「今なんと?」

「お弁当を残さず…」

「その後!」

「…いや、たまには僕にお弁当を作ってくれないかなと。」

「良い事を聞きましたわ」(ボン)

「じゃあどういづのはどう?明日みんなでお弁当を作ってきて味比べするの。」

「おっ!…面白そうじゃん」

「千夏!…素晴らしいですわ!」

「音はどつ?」

「まあ良いと思うよ。楽しそうだし。」

「じゃあ決定!せっかくだし明日は外で食べましょ。そうね…中庭なんか良いと思うんだけど。」

『さんせ〜い!』

こうして明日、お弁当の試食会が開かれる事になった。

一方その頃、心はというと……

「相変わらずお兄さんは料理が上手だね。凄いよ!!」

「そっ…そうかな。」

「そうだって。こんな美味しいご飯が毎日食べられるなんて羨まし過ぎる!!」

「そんな大袈裟だよ。」

「…誰かの為に何かしてあげるって良いよね」

それまで静かに食べていた美由紀が突如口を開いた。

「どうしたの？美由紀。突然意味ありげにそんな事言っで。」

「だって…私の為にお弁当を作ってくれるのはすっごく嬉しいんだけど…私はそれに値するだけの事をしてるのかなって。」

「うわ。ほんとどうしたの？熱でもある？」

「そんなわけないでしょ。ただお返しぐらいはしてあげたいなって思っで。」

「ああ、なるほど。そういうことか。…良いんじゃない？たまにはお弁当ぐらい作ってあげても。それに、女たるものお弁当ぐらい作れないとね。」

ビク！！ 今の未央の一言に心の体が反応した。

「どうしたの？」

「あ…あのさ。女の子って料理出来ないといけないのかな？」

「いけないってことはないけど作れた方が何かと便利じゃない？」

「それに、未央の言うように”女”をアピールできるしねえ。家庭的な女性はポイント高いよ。私本気で作っちゃおうかな！！」

「おっ！！」

どうしよう…。私家ではごろごろしてるだけだし掃除だってしない。ましてや料理の手伝いだって…。ってよく考えたら全部にいに任せつきりじゃん！！

「よし…」（ボン）

そついうと小さく気合いを入れる心であった。

四宝院家 キッチンにて

「音ってば何が好きなのかしら…。」

家に帰ってくるると早速キッチンで明日持っていくお弁当（試作品）を作り始めた。ただいまいち良い案が浮かばず挑戦しては止めを繰り返していた。

「…分からないわ。こんな事になるならあらかじめ聞いておけば良かったかしら。」

「あの…。お嬢様？もしよろしければ私もお手伝いいたしましょうか？」

「じい…。結構よ！！自分でやらなくては意味がないの。」

「…ですが。」

「結構だと言っているでしょ…！」

「しかし…。これもキッチンを汚されますと…」

「……………」

今まで包丁すら握った事のないレイナにとって料理は未知の領域だった。従って皿は割るは鍋はひっくり返すはもうキッチンは大変な

有り様。しかもあらゆる調味料を加え作っていたせいか、異臭までもするしまつ。それに見兼ねた執事のじいがかけつけたというわけだ。

「じ、こんなのごつてことはありません。じいは黙ってみていなさい……」

「分かりました。お嬢様がそうおしゃるのであれば……何かありましたら声をかけて下さい。」

“ 待つてなさい音。美味しいお弁当を作って驚かせてやるんだから”

そう心に誓い再び包丁を握るレイナであった。

時を同じく七草家では……

「お母さん!!お弁当箱どこだっけ?」

「食器棚の所はない?」

「食器棚?……。ない。」

「おかしいわね。どこにしまったのかしら。……。もう、急に言う

からこういう事になるんですよ。」

「だって〜。」

「ダメね。ここにも無いわ。探しておくから明日はこれで我慢しなさい。」

そついうと大、中、小さまざまな大きさのタッパーが出てきた。ただあくまでタッパーだ。まったく可愛さはない。

「いやだよこんなの。貧乏くさいじゃん!」

「文句言わないの!急に言うあなたが悪いんですよ!」

「え〜〜。」

仕方がなくタッパーを受け取るしかなかった。

立花家では…

「明日はお弁当いらない?どうしたんだ突然。」

「た、たまには自分で作ってみようかなって。」

「お〜!! 良い心構え。」

「それにいに食べてもらいたいし」(ボソ)

「うん?何か言った?」

「な、なんでもないよ!!」

「なら良いんだけど。そうだ!それなら明日、一緒にお昼食べない?」

「えっ? にいと一緒に?」

昼間みんなで話した事を心に話してみた。人数は多い方が良かった。

「ってなわけ。どうかな?」

「行く!!絶対行く!!」

「わ、わかった。なら明日12時に中庭で。僕たちがいなかったら場所取って待ってて。」

「りよ〜うかい!!12時に中庭ね!! そうだに。私がお弁当作ってる時絶対見ないでね。」

「もし見たら？」

「殴る、蹴る、噛みつく。」

「わ、分かった…。絶対見ない…。」

「うん、よろしく さとと…」

明日一緒にご飯を食べる事になり一層気合いの入る心であった。

PM 12:00 中庭

「みんな揃ったみたいだね。」

予定通りこれからお弁当試食会が開かれる。

「さっき話した通り妹の心も呼んだから。」

「心です。今日はよろしくお願いします。」

「よろしく。心ちゃん！相変わらず可愛いねえ」

「いら哲。気安く触るな！！」

「良いじゃないか。あいさつだよ。あ・い・さ・つ！！」

「お前はダメだ。ところで…心は呼んだからいいとして、なんで姉さんがいるんだ？」

「良いじゃない ご飯はみんなで食べた方が美味しいし。」

昨日心に話した時にはいなかったのに。どこで聞いたのやら。

「まあ細かい事は気にしない。早速食べましょー!!」

「そうですわね。1・2・3で一斉に開けましょ？」

『せーの、いち・にーのさん!!!!』

『お~~~~~!!!!』

一斉にお弁当の蓋が開けられる。心は初めて作ったのにもかかわらず卵焼き、ほうれん草のおひたし、唐揚げとじつに食欲をそそるお弁当だ。

千夏はというと何故かタッパードったがおかずがタッパード一つ一つに小分けしてあり、卵とじ、サラダ、肉じゃがなど和風のお弁当であった。こちらにも美味しそうだ。

対するレイナは……キャビアのサラダにサーモンのカルパッチョ、高級ヒレ肉のステーキと…本当にお弁当か？と疑いたくなるような

豪華なものだった。

「さあ食べよ！ー！じゃあどれから…」

「音、さあ遠慮なく！」

「入れ物はともかく、味は保証するわ。」

「にい、い、心のもどろぞー！」

「みんなちよっと落ち着いて！ー！音ちゃん困ってるじゃない。はいあ〜ん！」

ペチ！

姉さんのおでこを叩く。

「あつ、いた！」

「なにさりげなくやってんの。それに姉さんのお弁当は僕のと一緒だから。」

「だって〜」

「ならさ。みんなでおかずを交換しあえば良いんじゃないか？」

哲が音を救うナイスな一言。

「…それもそうね。」

そういっておかずを一つずつ交換し始めた。哲も作ってきていたが…あいつが作るわけがない。おそらく母親に頼んだのだろう。

「ではさっそく!…」

哲が嬉しそうにレイナの作ってきたヒレ肉を真っ先に食べ始めた。こんな豪華なもの、そうそう食べれるものではないからな。そう思い僕も食べようとした時…

バタン!!

隣に座っていた哲が倒れてしまった。

「おっおい、大丈夫か!!」

「ちょ、ちょっと!!…しっかりしなさい!…」

「大丈夫ですか?白目になっていますわよ。」

「どうしてこんな。」

ふと哲の食べていたお弁当を見るとそこには食べかけのヒレ肉があった。

「……………ッ！まさか…」

「そのまさかのようなね。」

どつやら千夏も気づいたようだ。それにしてもお弁当を食べた人間が倒れるってあるのか。

「レイナのやついったいどんな味付けにしたの？」

「とりあえずこのままはまずい。なんとかしないと。…姉さん！」

「うん？なにに？」

哲が倒れたのにもかかわらず美味しそうにお弁当を食べている。

「姉さん！！何呑気にお弁当なんか食べてるの！！哲が倒れちゃったから手伝ってくれ！！」

「うん？あら大変！！」

そういつとようやく動き始めた。

心はというと……。あまりの出来事に腰を抜かしてしまったようだ。ただあう、あうと言っている。

張本人のレイナは…まるで原因が掴めてないみたいだ。呆れた様子で哲を見下ろしている。

姉さんの治療もあってしばらくして哲の意識が戻った。どうしたんだと聞くとやっぱり原因はレイナが作ってきたヒレ肉だった。食べた瞬間目の前が真っ白になったんだと。とりあえずお帰り。

それにしても……

「恐るべし、お弁当…」(ボン)

そう一言つぶやく音であった。

もちろんこの事件以来お弁当試食会が開かれる事はなかった。

第5話 「お弁当の力」(後書き)

〈次回予告〉

春期クラスマッチ。その予備選を控えメンバーを集める音。果たしてそのメンバーとは…

次回

第6話 「変わらぬ顔ぶれ」

「やるからには絶対勝ちましょ!!」

第6話 「見慣れた顔ぶれ」「（前書き）

（前回のあらすじ）

心の一言から始まった「お弁当試食会」。レイナがまさかの味音痴だったとは。

第6話 「見慣れた顔ぶれ」

「はーい。みんなおはよう。えー知ってると思うが今月末に春季クラスマッチがある。詳しい内容は……」

朝のHR。担任の遠藤が出欠確認を終え諸連絡を行う。今回の話題は今月末に行われる春季クラスマッチについてのようだ。

この学園では毎年春と秋に学校行事であるクラスマッチが開かれる。一般競技（バスケットボール、バレーなど）に加え魔法学園ならではの特別競技「魔法武闘戦」があるのが最大の特徴である。これは5人1チームの団体戦だが、メンバーをクラスメイトで選出せずとも良い。友達、先輩、後輩とはず、自由にメンバーを組めるのだ。それは元々、この競技が別日程で行われていたのを、半ば無理やりクラスマッチ競技に加えたため、その名残としてこの方法が採用されている。また近隣の学校ではあまりこのような行事がされないため、マスコミにも取り上げられ、その影響が年々出場者が増したことで春・秋通して非常に人気の高い競技となっている。

「……だ。何か質問があれば直接聞いてくれ。では、以上」

遠藤が教室から出ていくと、生徒たちは早速クラスマッチについて話しはじめた。自分には関係ないかのように1時間目の授業の用意をしていると哲が楽しそうに、にたにた笑いながら話しかけてきた。

「もちろん出るよな？」

「何に？」

「何って魔法武闘戦に決まってるじゃんか。」

「僕は出る気、全くないんだけど」

即答されたことが予想外だったのか、キョトンとしている哲をよそに僕は授業の準備を進める。淡白な性格からなのか、こういつものには「出たい人が出れば良い」としつつ考えてしまう。

「なあ 一緒に出ようぜ！」

「出るにしても人足りないよ？」

「それは……これから集める！」

「集まれば良いけどね」

「分かった。じゃあ……」

すると哲が言い切る前に一時間目の呼び鈴が鳴った。何か言いたそうにしていたが丁度先生が入って来たため「またあとで」と言う自分の席へと向かった。

向かい合わせで机をくっつけ、いつもの席に座ると各自昼食を食べ始めた。しばらくすると僕の隣に座っていた哲がかじりかけのパンを片手に話し始めた。

「クラスマツチ何に出るか決めたか？」

まだ出場競技を決めていなかったのか千夏とレイナは首を横に振った。

「ならば、魔法武闘戦出ない？」

2人は一度お互いの顔を見合わせると再び哲の方へと視線を向けた。

「私は構わないけど」

千夏はあっさり哲からの誘いを承諾した。それを確認すると今度はレイナの応答を促すように言った。

「マジか！良かった。レイナはどう？」

「出る出ない云々より、武闘戦の内容がいまいち理解出来ませんの」レイナは転校生であるため、僕たちが一年生の頃思ったような疑問を抱いていた。すると哲は大雑把に内容を説明し始めた。

「文字通り魔法を使った武闘大会だな。5人1チームになってあら

かじめ決められた種目を闘う。その勝敗条件を満たしたチームが勝利。まあ要するに闘って、自分と相手どっちが強いか示すってことだ」

「自分と相手どちらが強いか……」

説明を聞くとしばらく考え込み、自分の意思が固まったのかはつきりとした口調で言った。

「分かりましたわ。私もその武闘戦に参加させていただきます」

それを聞くと哲は一言感謝の言葉を述べると

「よし。これで4人。あとは……」

「ちょっと待って。僕はまだ出るって言ったわけじゃ」

「出ないのか？」

僕が頼みごとを断れないと思ってか、「出るに決まってるよな」とでも言うかのように聞いてきた。

「……出るよ」

「ありがとう」

予想通りの反応に笑顔でそう答えると残りの1人をどうするか話し始めた。すると何か閃いたのか千夏が口を開いた。

「いるじゃん！いい子」

「誰ですの?」

そついうと千夏は僕を指差した。

「……そうか!すっかり忘れてた。でも大丈夫か?もう誘われたりして」

「それはね。ただ、音が頼めばひよっとしたら」

哲と千夏が話す中、僕とレイナはその相手が誰なのか分からないでいた。

『ですの誰?』

僕とレイナは同時に2人に聞くと、答えを焦らすように千夏が答えた。

「音がよく知っている人」

僕は腕を組みながら考えているとようやくその答えが分かった。レイナはというとまだ一人ぶつぶつと言いながら答えを探しているみたいだ。

「でも大丈夫かな?断られたらどうする?」

「その時はその時で考える。とりあえず聞いてこい」

「分かった」と言おうとした時、それまでずっと考えていたレイナが「もう限界」と言い放ち少し不機嫌そうに言った。

「いったい誰ですか？」

どうでも良いようなことにここまで真剣に考えていた事を改めて思うと笑わずには要られない3人だった。

その夜、夕食を食べながら聞いてみることにした。

「心？」

「うん？何？」

「クラスマッチの事は知ってるよね？」

「もちろん知ってるよ。今日の話題もその事だったもん。」

「そっか……魔法武闘戦って誘われていたりする？」

「誘われたよ。心ちゃんが入ってくれば助かるって」

一瞬間を落としかけたが次の一言で留まった。

「でも、断っちゃた」

「どうして？」

それまで会話を聞いていた姉さんが興味あり気に聞いてきた。

「だって武闘戦ってよく分からないし、興味もなかったから」

「ふん。そうなんだ。心ちゃん強いから出れば良かったのに」

「良いよ、私は。それに見てる方が楽しそうだし」

そういつと中断していた食事を再び再開する。僕は心の答えを聞いて再び肩を落としそうになるが駄目元だと思い聞いてみることにした。

「僕と一緒に出場しない？って言ってもダメかな？」

「え？」

心は聞き取れなかったのか確認するように目を見開いて僕の方へ視線を向けてきた。再び僕は聞いてみる。

「一緒に武闘戦に参加しない？」

「にいと……一緒に？」

誘わていることが冗談ではないかと、疑うような表情をしていた心だったが僕が本気だと理解するとその表情はたちまち笑顔になった。そして

「出る！あつ……でも、私なんかで良いの？」

「もちろん。心じゃないとだめ」

「あゝ心ちゃんだけ良いな。音ちゃんに求められて。ずるい」

ぶつくさ言っている姉さんを見無視し今日みんなで話した事を心に話した。最後のメンバーには心が良いと。それを聞くと更に笑顔になり

「嬉しい！誘ってくれてありがとう。にい、私頑張るから」

そついうと胸の前で可愛くガッツポーズをした。それを見た僕も表情、仕草につられ笑顔で「よろしくね」と答えた。

こうして魔法武闘戦の出場メンバーが決まった。僕、哲、千夏、レイナ、そして心。普段一緒にいるメンバーと変わらないことを改めて思うとついつい笑ってしまう音だった。

第6話 「見慣れた顔ぶれ」 (後書き)

〈次回予告〉

魔法武闘戦の出場メンバーも決まり、一段落。哲が「顔合わせ」と称した企画でまさかの戦い勃発？！

次回

第7話「小さき戦い」

「何、お願いしよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9000z/>

姉と妹は僕に優しい

2012年1月10日04時47分発行